

耐性ウイルス、強い感染力

レットを入れると感染することも確認した。

抗インフルエンザ薬「ゾフルーザ」が効きにくい耐性ウイルスは、薬の効くウイルスと同じくらい感染力があり、

症状が重くなる可能性があることが、東京大の研究チームの研究でわかった。25日付の科学誌「ネイチャー・マイクロバイオロジー」に論文を発表した。これまで耐性ウイルスは感染力が弱いとされてきた。専門家は、薬の効かないウイルスが広まる恐れがあるので、耐性ウイルスがでやすい子どもには注意深く使う必要があるとしている。

河岡義裕・東京大医学研

専門家「子に投与注意」

研究所教授らは昨冬、ゾフルーザをのんだ後に耐性ウイルスが検出された患者4人のウイルスと、治療前に採取した耐性が生じていないウイルスを分離。それぞれをハムスターやマウス、フェレットに感染させ、感染力や症状を比べた。

耐性ウイルスは、感染したマウスやハムスターに、耐性の無いウイルスとほぼ同じように体重の減少を引き起こした。また、肺や気管で通常のウイルスと同じように増えた。感染させたフェレットの隣のカージに感染していないフェ

レットを2018年3月に販売を開始。錠剤を1回のめばよいと、厚生労働省によると昨季の抗インフルエンザ薬供給量の4割近くを占めた。一方、臨床試験で耐性ウイルスの発生しやすさが指摘されており、とくに免疫力の十分に発達していない12歳未満では23・4%に発生した。

日本小児科学会は今年10月、12歳未満は「ゾフルーザの積極的な投与は推奨しない」「使用にあたっては耐性ウイルスの出現や伝播について注意深く観察する必要がある」とする治療指針を示している。

(大岩ゆり)